

## Contents

## 《緩和ケアチーム特集》

- ◆緩和ケアチームからのメッセージ
- ◆ソーシャルワーカーの役割

- ◆管理栄養士の役割
- ◆看護師の役割
- ◆薬剤師の役割
- ◆リハビリテーションの役割

## 緩和ケアチーム特集

## 緩和ケアチームからのメッセージ

総合内科部長、在宅医療室長、緩和ケアチーム部長 竹下 啓

世界保健機関では「緩和ケアとは、生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、的確なアセスメントと対処（治療・処置）を行うことによって、苦しみを予防し、和らげることで、クオリティ・オブ・ライフを改善するアプローチである。（日本ホスピス緩和ケア協会訳）」と定義されています。緩和ケアというと、がんのイメージが強いですが、どのような疾患であっても緩和ケアは重要です。呼吸器疾患、循環器疾患、神経疾患などの症状を緩和することも緩和ケアなのです。とはいえ、がんが代表的な疾患であることは間違いありません。最近の研究では、緩和ケアには、進行がんの患者さまの苦痛を緩和する効果だけでなく、生命を延ばす作用もあることがわかっています。

がん対策基本法に基づき、当院の多くの医師が「がん診療に携わる医師のための緩和ケア研修会」を受講し、どの医師でも十分な緩和ケアをできるよう修練しています（受講した医師の氏名は、東京都のホームページでご覧になれます）。しかし、どんなに優れている医師でも、ひとりで適切な緩和ケアを提供することは困難です。そこで、当院では、多職種からなる緩和ケアチームが、緩和ケアのサポートをしています。当院には緩和ケア病棟はありませんが、緩和ケア病棟に負けないような医療とケアを提供できるよう努めています。

緩和ケアの専門外来としては、緩和ケア相談外来と精神腫瘍外来を開設しています。緩和ケア相談外来では、その名前の通り、緩和ケアを希望する患者さまやご家族を対象に、当院や他施設を含めてどのように緩和ケアを進めたらよいかの相談に応じています。

精神腫瘍外来というと、ちょっといかつい印象を持たれるかもしれませんね。「精神腫瘍学」とは、がんの患者さまやそのご家族に特有の精神的な問題を対象とした臨床医学です。当院精神科部長の中野智仁医師は、国立がん研究センター中央病院で精神腫瘍学の研鑽を積んでまいりました。この分野の専門家は日本にはまだ少ないなか、精神腫瘍外来でみなさまのお役に立てることは私たちが誇りに思っているところです。

私たちの守備範囲は入院と外来だけではありません。病院の近隣の患者さまに対しては、在宅医療室から訪問診療や訪問看護も行っています。

さて、医師の話はここまでにして、医師以外のプロフェッショナルからのメッセージをご紹介します。





## ソーシャルワーカーの役割

がんについての相談窓口は、OCNS、ソーシャルワーカー、薬剤師、総合サービス室、医療連携室担当者等、多職種によるスタッフで構成しています。相談内容も多岐にわたり、免疫療法を含む治療方法や、仕事や介護などの生活、病気に対する不安などをうかがっています。

在宅医療についてのご相談も多く承っています。当院の緩和ケアチームは、在宅医療への支援に特に力を入れています。当院の在宅医療室の対象地域外の患者さまにも、適切な在宅療養支援診療所や訪問看護ステーションをご紹介しますことができますので、在宅での緩和ケアを諦めずにぜひご相談ください。

また、がん相談事業の一環として、当院外来および入院患者さまとご家族を対象に、患者さまの集いを開催しています。毎回、テーマを決めて、専門スタッフによる講義の後、患者さまとの意見交換の時間を持っていますが、私たちも学ばせていただく貴重な会となっています。

当院の病院理念である「心ある医療」を実践すべく、どのような段階においても、患者さまやご家族と私たち医療スタッフ側も共に歩む、という姿勢を忘れず、日々の相談にあたっていきたくと考えております。

患者さまの集いは当院の患者さまとご家族の限定にはなりますが、がん相談窓口についてはどなたでもご利用になれますので、ぜひご利用ください。(村崎 美和)

## 管理栄養士の役割

お食事は入院中の楽しみの一つですが、栄養状態が低下すると治療にも支障が出ます。抗がん剤の主な副作用である吐き気に悩まされたとき、がんのために体調がすぐれず食欲が出ないときなどには、栄養士が病室へうかがい、食事についてご相談させていただきます。たとえば、吐き気のあるときの対応の一つとして、食事を調整して高カロリーで栄養バランスのよい食品をつけることを提案したり、嗜好に合わせ口にしやすいものを提供したりしています。また、ご自宅での食事についてもご相談ください。私たち栄養士は、患者さまやご家族と“顔の見える関係”を心がけておりますので、どうぞお気軽にお声かけください。(島田 真理子)

## 行事予定

### ★★一般市民向け★★

#### ●市民公開講座

日時 平成25年10月27日(日)  
内容 『前立腺がん 一検診から診断・治療まで』  
会場 薬学部コンベンションホール(白金キャンパス内)  
※詳細につきましては、当院のホームページをご覧ください。

### ★★医療従事者向け★★

#### ●がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会

日時 平成25年10月12日(土)13時00分から20時00分(予定)  
平成25年10月19日(土)13時00分から20時00分(予定)  
会場 本館2階 大会議室(白金キャンパス内)  
修了証書 2日間の参加が条件となります。  
問い合わせ先 03(3444)6161【代表】教務課  
※申込方法等、詳細につきましては、当院のホームページをご覧ください。

腫瘍センター News Vol.3 (第3号) 平成 25年8月1日発行  
北里大学北里研究所病院  
東京都港区白金5-9-1 TEL 03(3444)6161【代表】  
編集責任者 腫瘍センター センター長 浅沼 史樹  
<http://www.kitasato-u.ac.jp/hokken-hp/>

## 看護師の役割

なるべく治療初期からがん看護専門看護師(OCNS)が、患者さまやご家族にお会いして、全人的な状態(身体的・精神的・社会的・霊的側面)を把握するように努めています。

各部署の看護では、緩和ケアチームリンクナース(外来・腫瘍センター・病棟)が中心となりOCNSも連携し、治療面と緩和ケアの両方の視点を備えて看護を行なうように心がけています。

腫瘍センターとしては、カンファレンスや事例検討、看護職のためのエンド・オブ・ライフ・ケア研修会(ELNEC-J)の開催を通じて、看護師が実践で得た経験知に新たな知識が積まれるように、看護の質向上に努力しています。

看護師は患者さまやご家族に最も近くで寄り添うことができる看護のプロフェッショナルです。どんなことでもおひとりで悩まずに、どうぞ看護師にご相談ください。(荻原 修代)

## 薬剤師の役割

がんになると約8割の人が痛みを感じます。原因は「がん自体の痛み」「治療に伴う痛み」「がんに関連した痛み」「がんとは直接関与しない痛み」の4つに分けられます。1986年に発表された「WHO方式がん疼痛治療法」はこれらの痛みから解放することを目的としており広く実践されています。がんの痛みは辛抱する価値のない痛みであり、まず痛みを妨げられない夜間の睡眠を得ることを目標に痛み止めを使用します。痛み止めには医療用麻薬もありますが「中毒になる」「強い副作用がある」などの誤解を持つ人もいます。しかし痛みに対して使用している限りは中毒にはなりませんし、また便秘、吐き気、眠気などの副作用は起こりえますが対応策はきちんとあります。むしろ使用をためらって少ない量だと鎮痛効果が得られない上、副作用が起こります。したがって痛みを上手にコントロールして、よりよく生きるためには積極的に医療用麻薬などの痛み止めを使用することが重要です。緩和ケアチームでは、麻酔科医長の西脇千恵美医師の指導も仰ぎながら、それぞれの患者さまに最善の薬物治療を目指しています。

薬剤師は、当院のすべての病棟に配属されています。また、当院では院内調剤を行っており、外来患者さまにも薬剤師が身近に接することができます。お薬のことでおわかりにならないこと、不安なことがありましたら、どうぞ薬剤師に声をおかけください。(齋藤 雅俊)

## リハビリテーションの役割

がんに対する治療やがんそのもので、日常生活に対するさまざまな障害が発生します。私たちリハビリテーションに携わる三職種(理学療法士、作業療法士、言語聴覚士)は、患者さまのご希望を尊重しながら、身体機能、精神機能、病期に合わせて、少しでもそのひとらしく日常生活を過ごせるようにアプローチしています。

ご病状によっては、自宅へ退院することに不安を感じる方もいらっしゃると思います。私たちは、みなさまが安心して在宅療養を送れるよう、身体面の訓練のみならず、福祉用具の導入や住宅改修へアドバイスを行ったり、ご家族を対象に介助方法の指導をしたりしています。(穴田 聡)